

第9回県立特別支援学校編成整備に関する懇話会 概要

日 時：平成23年12月15日（木）15:05～17:13

場 所：県庁13階教育委員室

出 席：西原会長、大城副会長、上間委員、緒方委員、金城委員、東風平委員、田中委員、
玉元委員 【欠席：上原委員】

事務局：嘉数教育企画監、長浜主任指導主事（県立課）、大嶺

傍 聴：6人（うち報道関係者3人）

1. 決定事項

特になし。

2. 議事要旨（「特別支援学校編成整備実施計画（素案）」について）

【施策7（個別施設整備計画の作成）関連】

- ・鏡が丘特別支援学校は、屋内に大きなスロープがありすごく面積をとっている。それを取れば、病弱関係の整備ができる。
- ・鏡が丘特別支援学校のスロープは、歩行訓練や自立活動で使っている。また、電気が故障した時にスロープがないと移動できなくなる。
- ・他のスロープのない学校は、緊急時の避難経路を考えておく必要がある。
- ・鏡が丘特別支援学校はエレベーターが1機しかない。新しく設置を考える必要がある。
- ・目標6-(2)では、森川特別支援学校が一部改築計画となっているが、休校になる実施計画と整合性がとれないのでは。

【各施策関連】

- ・泡瀬特別支援学校分校は、分校の規模としては大きすぎるのではないかと（施策5）。
- ・泡瀬特別支援学校分校は、新しい学校として地域の核になる、夢のあるスタートがいい（施策5）。
- ・地域にニーズがあるということでの学校設置が基本になる（施策5）。
- ・森川特別支援学校や泡瀬特別支援学校は、当初敷地が十分に確保できずなかったのが分校で始まった。泡瀬特別支援学校分校は敷地があるので、本校が望ましい（施策5）。
- ・那覇特別支援学校の校地で、新たに知的障害を受け入れられるか疑問だ（施策2）。
- ・新しい学校がみな分校では、分校だらけになる。50人だと本校で始めればいい（施策5）。
- ・地震津波対策が重要となり、財政も逼迫している中で、森川特別支援学校のような山の手の学校を休校にしているのか。有効活用するというのが普通の考えでは（施策4）。
- ・森川特別支援学校は沖縄病院が隣接している。有効な活用ができるはずだ（施策4）。
- ・全国の特別支援学校の状況から見ても、学校数の約5～8%と分校は少ない（施策5）。
- ・もっと市町村も積極的にしないと、県教委が動いても、地域の考え方にしろ学校の使い方にしろずっと平行線ではないかと（施策1）。

- ・応じる市町村がなかったり、地域が偏ってしまっただけでは計画の意味がなくなる。市町村教委の了解や理解が重要だ（施策1）。
- ・色々な障害の方々を受け入れてもらえる土壌をつくるのは時間がかかる。これからどの程度の時間をかけて啓発をやっていくのか（施策1）。
- ・計画の実施段階においては、実務者も会議に入ってもらってお互いで情報交換して共通理解しないと、話がこれ以上進まない（施策1）。
- ・具体的に授業を相互乗り入れするというのであれば、地域の理解も深まるだろう（施策1）。
- ・学校が総合商社のように全て担う時代ではない。福祉サービスもあり、必ずしもスクールバスのみが輸送手段ではない。社会資源を使うことでスリムにできるのでは（施策6）。
- ・知的障害高等部の単独で福祉コースは、現実的に学校として厳しいと思う（施策2）。
- ・これまでも福祉に関する取組はあった。やり直すのであれば、那覇特別支援学校だけでなく、今までやった学校でもやる必要があるのでは（施策2）。
- ・デイサービスは親の負担軽減になっている部分はいいが、子どもと親と触れあう時間が短くなっている。また、競争的な側面もあるので、配慮が必要（施策6）。
- ・分校・分教室は受け皿となる小・中・高校が必要になるが、お願いして受け入れてもらうのではなく、一緒にやるんだという発想が必要だ（施策1・2）。
- ・南部地域で高校が廃校になった跡地に特別支援学校の拠点校をつくれば、各地域に拠点を設けるとすることで、北谷高校の再編への説得力も増す（施策2）。
- ・軽度知的障害高等部の分校・分教室の整備や、施策3の推進にあたっては、既存校の規模を考える必要がある（施策2・3）。

【その他】

- ・寄宿舎は、通学が可能であれば自校以外の子も入舎させることが必要ではないか。
- ・寄宿舎を校内とは別に整備して、色々な学校、障害種の子どもが入舎してもいいのでは。